《岐阜県知事賞》

家族との時間

養老町立高田中学校　３年
服　部　　心

「えっ？」
頭が真っ白になった…。
何気ないいつもの毎日。幸せな明日に向かって時間が進んでいたあの瞬間に、それは突然起こった。祖父の「おい、大丈夫か！どうしたんや！」という声が家中に響き渡った。
と同時に、「ちょっと、心！」と私の名を呼ぶ声がした。私は大声で返事をし、声のする方へ走っていった。嫌な予感がした…。胸がぎゅっと締め付けられていくのが分かる。たどり着いた瞬間、想像以上の光景が私の目に飛び込んできた･･･。
祖母が嘔吐し汗を流しながらたおれている。鼓動は速くなっていくのに、私の中の時間が止まる…。体はすくむ…。「どうしてこんなことに？」「急に何で？」たくさんの思いが交錯し、恐怖につぶされそうになりながら、私は祖母が救急車で運ばれていくのをただただ見ていた…。
後日、祖母は「くも膜下出血」と診断された。死亡する確率は５０％、手術成功率は４４％の難病だ。にも関わらず祖母は助かった。嬉しさと安堵感で私の心はいっぱいだった。そして、コロナ禍で病院へのお見舞いが厳しく制限される中、「早く会いたい。」という思いが何よりも強くなった。
そうしているうちに祖母は退院した。久しぶりに見るその姿。後遺症が残り車いすに乗って帰ってきた祖母の姿に言葉を失った。変わり果てていた。体はやせ細り、血色が悪くなってしまった祖母になんて声をかけたら良いのか。「ばぁば、おかえり…。」これがあのとき唯一かけることのできた祖母への言葉だった。くも膜下出血は、後遺症が残れば重度の失語症や運動麻痺を起こす病気。祖母はこの困難とこれから闘っていくことになる。体の中心から右半身が動かず、不自由な生活を送る毎日。自分の感情が思うように伝わらず、苦しそうな表情を浮かべる祖母に後悔する気持ちがわき上がった。「あぁ、あの時もっと何かできていたら…。」「何か手伝っていれば、後遺症は残らずにすんだのではないか。」と…。
祖母は病気になってから泣くことが増えた。あんなに笑顔で、たくさん叱ってくれて、おもしろい祖母の姿はもうどこにもなかった。
しばらくして、私は母の勧めで、介護についての講習会に参加した。そこで私は、「介護をする人は、される人の心に寄り添う事が大切」だと学んだ。はっとした。私は昔の祖母の姿ばかりにとらわれ、今の祖母らしさやありのままの祖母の姿を受け入れることができていなかったのだ。それから私は、祖母との時間を今まで以上に増やし、折り紙を折ったり、左手で一緒にご飯を食べたりと、祖母と一緒にできることをしている。起きてしまった過去を変えることはできないが、未来を変えることならできる。限られた時間、ほんの一瞬の行動が未来の自分や家族にどう繋がり残っていくのか深く考えて欲しい。
あれからもう一年が経つ。今祖母はリハビリにマッサージと、新しい自分と向き合い、後遺症を乗り越えようとている。笑顔も増えた。今振り返ると、あの出来事があって良かったとは決して思えない。でも、あの出来事があったからこそ、家族と過ごす時間や関わりがかけがえのないものなのだと気付くことができた。家族という存在。人生なんて何が起きるか分からない。後悔をしたくない。だからこそみなさんに今一番伝えたいことがある。まずはあなたのすぐそばにいる家族に目を向けて見て欲しい。今まで気付けなかった、家族の温かさに触れることができるはずだ。家族の大切さは日常では気付きにくいのかも知れない。だからこそ、目を向けよう。今は良さを見つけられなくても、いつか必ずあなたにも見えるようになる。
「ばぁば、今日は鶴折ろうな！」
「いいで、紙持ってきぃ！」